ウ ワ セ ——代 踏 み 田 下 駄——

井之本　　泰

はじめに

1980年の秋も深まった11月頃，次年度の衣生活展の調査のため，福井県境の大浦半島の舞鶴市字田井を訪れた時のことであった。

作業小屋でワラゾーリを編むお婆さんから衣生活のことを聞き終え，立ち上がろうとふと壁に目をやると，枠型の大きな下駄らしきものが柱と壁の間に差し込まれているのが目にとまった。

「お婆さん，この大きな下駄のようなものは何ですか。」

「あぁ，これかいな，これはここら地ではウワセ(第１図)というてな，田植えの前に，これをはいてシバ草などを踏んで場をならすんですわ。」

この時，はじめて田下駄のことを知ったのである。しかし，その時には，衣生活の方に関心が向いていたため，田下駄のことについては気にとめなかった。

翌年の1981年，京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した久美浜町字橋爪の橋爪遺跡の発掘において，大量の木製品のなかから，田下駄(第２図)が発見されたとの新聞発表によって，考古資料による丹後地方の田下駄の存在を知った。

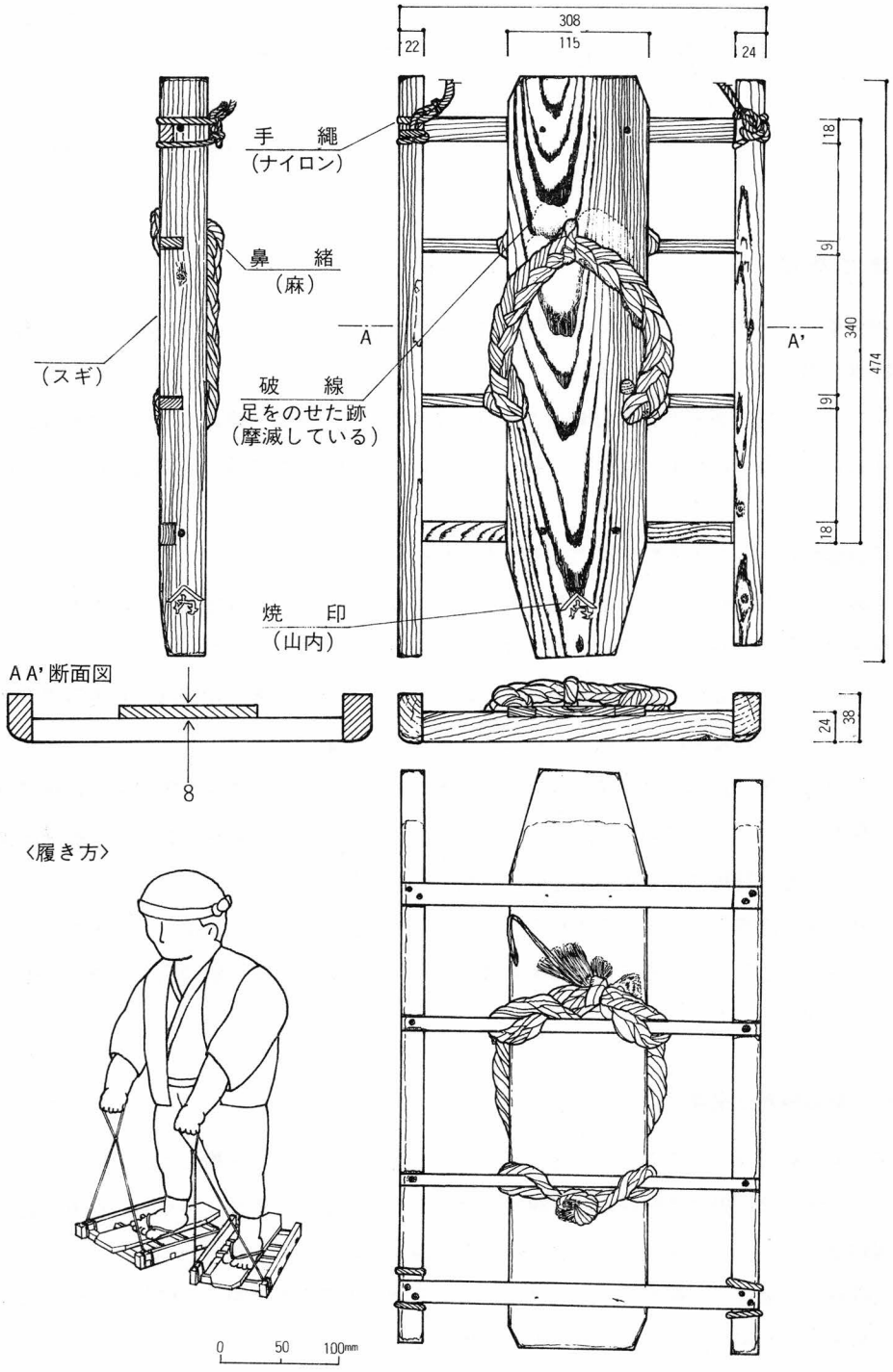
それ以来，調査の折には，田下駄のこともあわせてたずねるようになっていった。以下の一文は，お忙しいところを色々と教えていただいた人びとの田下駄の話をもとに，書き綴った調査メモである。

田下駄の種類と用途

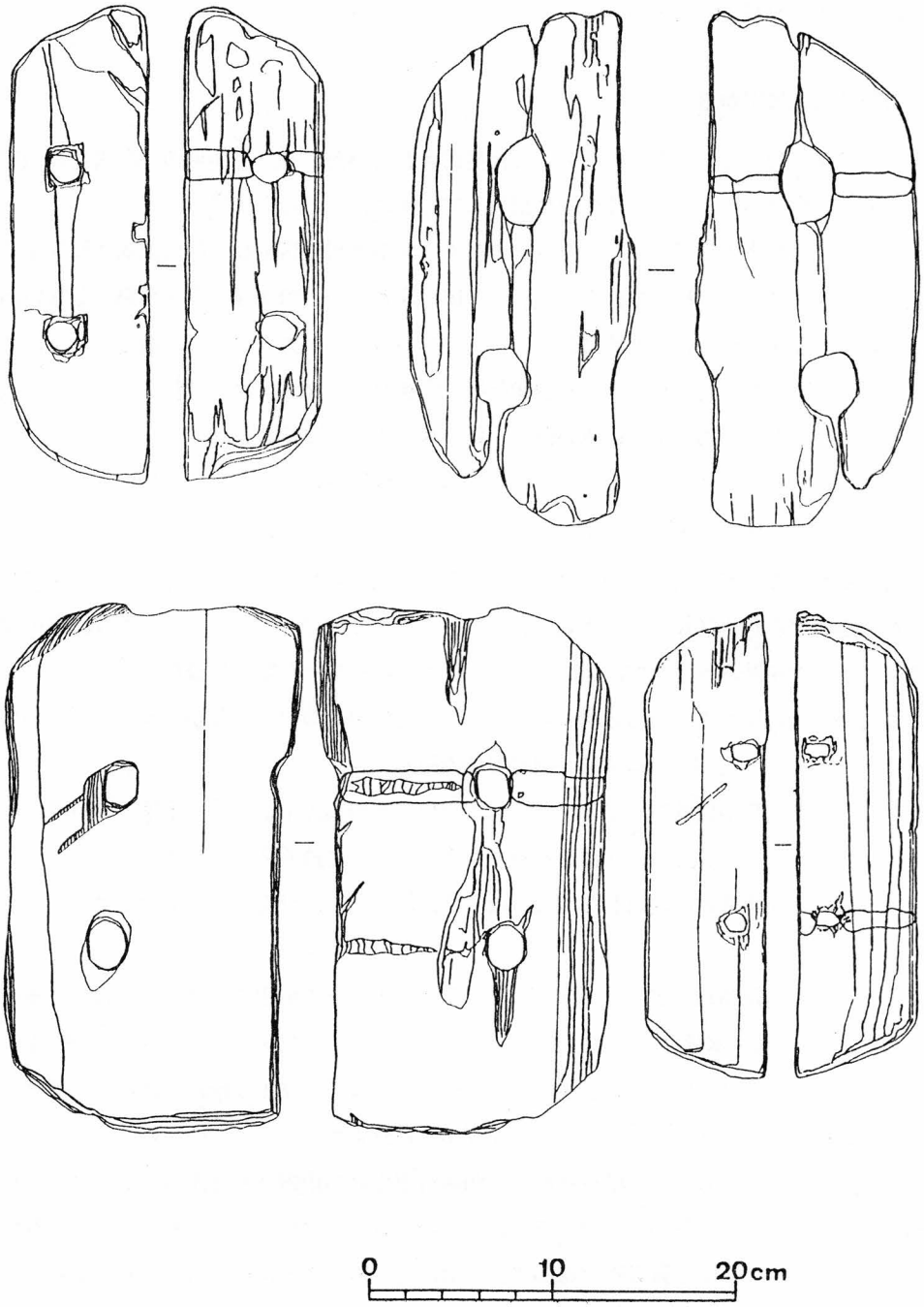
田仕事の際に履く鼻緒のある大きな下駄のような履物のことを総称して田下駄と呼ぶ。この田下駄には，田の代踏みの時に履く代踏み田下駄と稲刈りの時に履く稲刈り田下駄の２種類がある。この２種類の田下駄は使い方が異なることが知られている。

代踏み田下駄は，田植え前の仕上げに，これを履いて田の表面を平らにし，表土をこなすためと，シバ草などを踏み込むために使用する。

稲刈り田下駄は，深田の稲刈り作業に，足が泥中にはまり込まないように履くものである。



第1図　ウワセ（舞鶴市字田井）



第2図　タゲタ(久美浜町橋爪遺跡出土)戸原和人・伊辻忠司「橋爪遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』(第4冊) 1982

この田下駄は，静岡県の山木遺跡をはじめ滋賀県の大中の湖南遺跡などの弥生時代の遺跡から出土例が報告されている。

丹後地方の事例から

では丹後地方では，田下駄がどのように使用されていたかを，①使用地　②名称　③使用方法　④使用年代　⑤その他の順に配列して，次にふれることにする。

事例1　①宮津市字日置　②ナエシロフミゲタ　③苗代用の田下駄　苗代は幅3尺5寸で1坪あたりに3～5合程度の籾をまく。その際，場が悪いと籾が浮き上がり発芽しないため，場をナルメル(ならす)ために使用した。ナワシロフミゲタでならしたあと，さらにクワブロ(風呂鍬)でととのえた。④昭和30年頃　⑤ナワシロフミゲタの材料は，腐らないクリが優れているが，田仕事には重いため，軽いスギがおもに使われた。

事例2　①舞鶴市字白杉　②オオアシ　③本田用の代踏み田下駄　ヒラグワ(平鍬)でアラオコシ(荒起し)をしたのち，水をマワシ(入れる)，山や田の畔にあるイタゾリやマオ，そしてカイコが食べ残した桑の葉やフンなどを田にまき，オオアシで踏む。④明治42年生れの中道かねさんが小学校4～5年頃，親からゲタフミに行けといわれ，シルタ(湿田)のなかでオオアシを踏みはずして，ひっくり返り泥だらけになった頃が最後だったという。このことから大正頃までと推察される。⑤オオアシを使用しない人もなかにはいた。この場合，両手に竹をつえがわりに持ち，素足で踏み込んだ。

事例3　①舞鶴市字佐波賀　②オワセ　③本田用の代踏み田下駄　5月末頃にシバ草の新芽が出ると，ジルタ(湿田)一面にシバ草をまき，オワセで踏み込んだ。④耕運機が普及しはじめる昭和30年代には使用しなくなった。また板に柄をつけたエブリでならすようになる。

事例4・5　①舞鶴市字田井・小字水ケ浦　②ウワセ　③本田用の代踏み田下駄　アラオコシをミツグワ(三本鍬)でおこない，ヒラグワ(平鍬)でコナシダ(土を細く打ち砕き)をして，シバ草(クリやクヌギの葉)を肥料がわりに田へまき，ウワセで踏む。踏み歩く順序は田の畔にそって外側から右回りに回りながら中央に踏んでいく。その際，ウワセの内側が開かないように注意しながら踏み進む。④明治31年生れの山内ハルさんのところでは，耕運機を購入したのが，昭和50年頃であったため，それまでは現役としてウワセが使われた。⑤山内ハルさんによると舞鶴市字栃尾周辺では，ところどころに深い田があり，稲刈りにはゲタを覆いておこなうところがあるという。

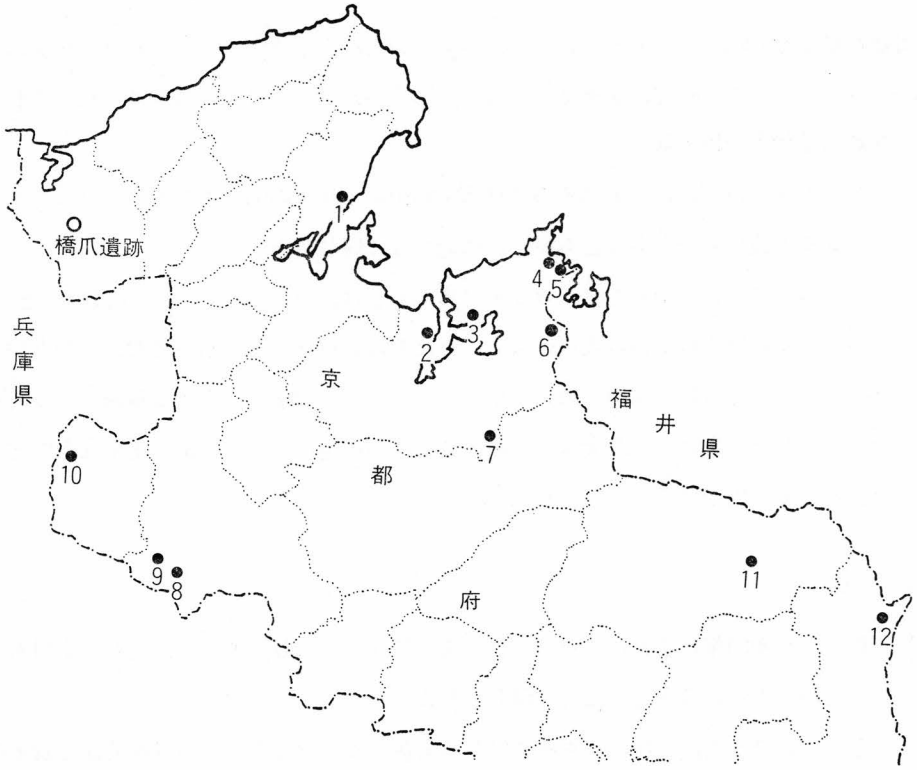
事例6　①舞鶴市字杉山　②オワセ　③本田用の代踏み田下駄　牛でアラオコシをして，雑木の枝や葉の小さいものをまき，ヒラグワで打ち砕く。これをシバタと呼ぶ。次にオワ

セで場をならす。オワセは田に立って一歩踏み込むと枠が沈み，桟の間から泥がわき上がる。次に手縄の一方を引き上げてオワセを前に進める時，枠のうしろがひきずられて泥がこなれ，田の表面をならしていく。オワセはひきずるようにして歩かなければオカゲ(効果)がないという。④昭和30年頃から板に柄のついたエンブリでならすようになった。⑤シルタの稲刈りでは，足が泥の中にはまり込まないように板型の「ゲタ」を履く。山の谷間のシルタでは，稲刈機も入ることができないため，現在でもゲタが使われている。

事例７　①舞鶴市字岸谷　②オワシ　③苗代用の代踏み田下駄　４月上旬から苗代準備にとりかかり，苗代の場ならしにオワシで踏む。④20年ほど前から，板に柄のついたマンワでかいてならすようになった。

以上が現在までに確認することができた丹後地方の田下駄の事例である。７例(第３図)とわずかではあるが，少し整理してみる。

代踏み田下駄には，苗代用(事例１・７)や本田用(事例２～６)の２種類がある。さらに本田用の田下駄は，田植え前の仕上げ用(事例６)とシバ草などの踏み込み用(事例２～５)とが認められる。



第3図　代踏み田下駄の分布図

第1表　代　踏　み　田

No.	名　　称	使　　用　　地	高　さ (cm)	た　て (cm)	よこ(巾) (cm)
1	ナエシロフミゲタ	宮津市字日置	2.9	33.8	21.2
2	オオアシ	舞鶴市字白杉	3.8	53.8	28.8
3	オワセ	舞鶴市字佐波賀	3.8	53.2	32.8
4	ウワセ	舞鶴市字田井	4.3	47.4	30.8
5	ウワセ	舞鶴市字田井小字水ケ浦	3.7	57.2	30.2
6	オワセ	舞鶴市字杉山	3.3	64.5	31.1
7	オワシ	舞鶴市字岸谷	2.8	36.8	17.8
8	オオアシ	福知山市字甘栗	4.8	41.0	25.2
9	オオアシ	福知山市字小牧	3.8	37.4	26.2
10	オオアシ	夜久野町字板生	3.0	36.0	27.5
11	ウワアシ	美山町佐々里	3.0	52.3	28.5
12	ウワアシ	左京区久多	3.6	56.2	30.5

上表の No. は事例番号や第3図代踏み田下駄の分布図と対応する。また No. 8～12は京都府立総合

計測の結果(第1表)，最も小さいのは，事例1の宮津市字日置のナエシロフミゲタの33.8センチ×21.2センチで，事例7の舞鶴市字岸谷のオワシとほぼ同じであった。これらはいずれも苗代用の田下駄である。

また最も大きい田下駄は，事例6の舞鶴市字杉山のオワセの64.5センチ×31.1センチでたて50センチ前後のものがもっとも多く，構造もほぼ同じであった。

先にも述べたように，地元では「ウワセで歩く」とは言わずに，「ウワセを踏む」という言い方をする。田下駄は田の表面をならすとともにシバ草などを踏み込むためのもので，ある程度泥に沈むくらいでないと効果がない。このことは代踏み田下駄の機能にとって重要な意味を持つとともに，枠の大きさや桟の数などの構造によって，田の土や深さなど当時の状況を知ることができると考えられる。

おわりに

田下駄は，昭和30年代を境に，田の改良で深い田がなくなり，機械化が進み，肥料も草から化学肥料へと変わるとともに姿を消してしまった。

しかし，このような農具は，泥まみれになって耕しつづけた人びとの営みを知る貴重な資料である。

下　駄　計　測　値

踏板(巾)(cm)	よこ桟(本)	たて桟(本)	重量(kg)	所　蔵　者
11.8	2	2	0.46	京都府立丹後郷土資料館
11.0	2＋2	2	0.75	京都府立丹後郷土資料館
11.2	2＋2	2	1.30	京都府立丹後郷土資料館
11.5	2＋2	2	0.89	京都府立丹後郷土資料館
11.2	2＋2	2	1.30	京都府立丹後郷土資料館
11.4	2＋2	2	1.17	京都府立丹後郷土資料館
6.8	2＋1	2	0.54	京都府立丹後郷土資料館
10.1	2＋1	2	—	京都府立総合資料館
10.1	2＋2	2	—	京都府立総合資料館
13.0	2	2	—	夜久野町立精華小学校
11.2	2＋3	2	—	京都府立総合資料館
9.2	2＋2	2	—	京都府立総合資料館

資料館『京都府の民具』(第2集)1978による。

今後，さらに代踏み田下駄を使ったことのある土地をさがしだし，使った方々から詳しく当時の状況を教えていただきまとめていきたいと考えている。

(井之本泰＝京都府立丹後郷土資料館技師)

調査協力者(敬称略)

○宮津市字日置　今井市之助(明治32年生れ)
○舞鶴市字白杉　田中ふで(明治22年生れ)
　　中道かね(明治42年生れ)
○舞鶴市字佐波賀　大島久雄(昭和元年生れ)
○舞鶴市字田井　山内ハル(明治31年生れ)
○舞鶴市字田井小字水ケ浦　橘幸太郎(明治35年生れ)
○舞鶴市字杉山　潮見タツ子(明治41年生れ)
○舞鶴市字岸谷　上野ます(明治30年生れ)